

NPO 法人芸術家と子どもたち

令和6年度 児童部ワークショップ ACT 報告



児童部では2016年からNPO 法人芸術家と子どもたちの協力を得て、ダンスアーティストの方々と入所児童とが、ワークショップという形で活動を続けてきています。児童で数名のグループをつくり、リズムや音楽を通して体を動かし様々な自己表現の場として、楽しみながらワークショップを続けてきました。NPO 法人芸術家と子どもたちとの活動は、児童とアーティストとの出会いの場をつくるのが目的とされているため、地域をはじめとする学校や施設など幅広い活動範囲があります。

その中で令和6年度には初めて他施設の児童とセッションをおこなうというワークショップを実施しました。私たちも初めての試みだったので子どもたちがどのような反応を見せるか内心緊張をしながら見守りましたが、同じ音楽やリズムに双方が意識し合いながら普段のワークショップとは違う新たな楽しい時間を過ごすことができました。

NPO 法人芸術家と子どもたちが、今回の活動を「障害のある子どもたちとの創造的体験の場づくりと施設間交流の記録」として冊子にまとめました。その中で友愛学園児童部から寄稿させて頂きました。また活動の振り返りも含めて、12月には「交流会議」と題して、NPO 法人芸術家と子どもたちの法人事務所へお招きを頂き、当園副施設長と放課後等デイサービス児童発達支援管理責任者の2名が参加し、セッションをした他施設をはじめ、同じような活動をおこなっている学校の教員などと意見交換や課題などを共有する場に参加してきました。

NPO 法人芸術家と子どもたちの活動や今回の冊子の内容、取り組みについての詳細はホームページでもご覧頂けます。

<https://www.children-art.net>

交流ワークショップ

オンラインでの交流ワークショップを行いました。友愛学園の子が考えた振付を●●学園の子に教えて、それをみんなで一緒に踊ったり、●●学園で行ったティッシュを使ったワークをみんなでやってみたり、それぞれが経験したこと、考えたことを伝え合い、画面を越えて共有する時間になりました。また、●●学園では、子どもたちがつくった舞台美術や衣装も紹介しました。始まる前は、オンラインでどこまで参加できるか不安もありましたが、感想を伝え合うことやお互いに見ることを、職員やスタッフが予想した以上に自然に楽しむ姿が見られました。



寄稿

友愛学園児童部
施設長

石川 淳



子どもの可能性を育む

友愛学園児童部は、主に知的障害のある18歳までの児童が生活をしている障害児入所施設です。

私たちが芸術家と子どもたちの活動に参加したのが、2016年のことで気付けば10年が経とうとしています。年齢の異なる5名程度の児童でグループを作り、リズムや音楽などで体を動かし、表現することを中心としたワークショップを行ってきました。毎年、児童の入退所があるため、それに伴いワークショップへの参加メンバーも入れ替えながら、これまでに参加した児童は実に53名に及びます。

活動へのお声かけがあり、参加することを決めるときは、単に子どもたちの余暇活動の一環として、楽しい時間が過ごせれば、との考えでした。余暇活動が十分でない現状もあり、その根底の思いは今も変わっていません。

しかし、これだけの期間と人数を継続してきたことには理由となるいくつかのエピソードがあります。

参加する児童の中には、輪に入ることに躊躇し、なかなか活動に参加できない児童もいます。単に恥ずかしいという気持ちだけではなく、障害特性から自ら失敗することが認められないことや、生い立ちの中で愛着が正しく形成されず自己肯定感が低く、自信が持てなくなっている児童もあり、気持ちを持って行くのも単純にはいきません。こうしたことも、アーティストをはじめスタッフの方々には共有してワークショップを展開して関わって下さっています。

アーティストに導かれ、少しずつ体を動かしていると、「それかっこいいね」、「わたしもそれやってみる!」などの声があいつく聞かれ、互いを認め合う言葉や共感し合うといった何とも言えない素敵な時間が生まれます。参加を躊躇していた児童も、はっきりと自信に満ち溢れた表情へと変わる瞬間を幾度も目の当たりにしてきました。児童の自己肯定感が育まれている証拠でもあります。

今年度は、はじめてリモート動画を使用して、他施設の児童とのセッションに取組みました。知的障害という特性からも、初めて会った画面の向こう側のお友達をどう理解し、画面を共有できるのか不安でしたが、その心配をよそに画面を良く見て相手の動きにも合わせながらダンスを披露し、その順応性の高さに只々、驚かされました。

これまでのワークショップを通して、生活の場では見ることのない姿や潜在能力に気づかされることが多々ありました。児童にとっての楽しいひとは、いつしか私たち支援者にも大きな意味のある活動となっています。

これからも小さな天才アーティストの活躍を楽しみにしていると共に、児童への新たな可能性の場を提供下さっていることに感謝いたします。